
月下の雪華

神楽樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月下の雪華

【Nコード】

N1081A

【作者名】

神楽樹

【あらすじ】

ある冬の日、こづのはるか高野遥は兄、こづのかなめ高野要を失った。悲しみに暮れる兄の婚約者である、しどうまことか紫藤円を見て目の前に現れた死神と名乗る少女のパートナーとなることを誓う。次々と死神の仕事をこなす遥の感情は日々磨耗していく。切なくも儚い死神家業を綴ったストーリー。どうかお楽しみくださいませ。

第一死：死神

夕刻が迫るオレンジ色の空から静かに舞い降りる白い粉雪。

今年の冬も雪が降っていた。

俺は雪が嫌いだった。

冷たいしめんどくさいし、何より昔のことを思い出してしまつから・
・・。

「はあ・・・寒いなあ・・・」

溜息まで白く煙る。

俺は仕方なく部屋に備え付けられたコタツの中に非難することにした。

このコタツという領域はコタツ布団に守られたエリアを極寒の悪魔から守ってくれるハイパーなバリアーなのだ！しかも各家庭に普及している優れもので比較的良心的な価格で誰しもが手に入れることが出来る冬の頼れる相棒だ！

などと意味のわからないキャッチコピーを自分で呟きながらゴロゴロしているこの青年は・・・。

この
高野 遥 はるか

因みに俺と言ってるから女ではないと思った人は偏見だが、この話にいたっては正解です。男です。何の捻りも無くてごめんなさいね？年の頃17歳。現在最寄の高校に通う高校2年生だ。

髪は耳に掛かるほどの長さで女の子のような顔をしている。そのせいか、異性に対しての緊張などが欠落しており、昔から異性の髪を平気で触ったり、女の子同士の話でさえ入っていける。それを嫌がられない端正な顔立ちと雰囲気から女の子からも人気であり、2月や誕生日はプレゼントがどっさりともらえる羨ましい男だ。

告白もちよくよく受けるのだが、なぜかこの男は断り続けているという男から見ると殺してやりたくなるような奴なのだが、サバサバした性格が同姓からも好かれるという完璧な世渡り上手な人間であつた。

「ううん。コタツは俺のパラライズ！つてパラライズは麻痺魔法だっけなー・・・パラダイスか？うむ、じっくりきますな！」

ブツブツと意味の無いことを呟きながらコタツから出ようとしない遥の耳に静かなノック音が聴こえた。

「ういーす。なんすか円さん？」

「遥くん、もうすぐご飯だけど、お腹すいてたらクッキーでも食べるかしら？」

控えめに部屋のドアを開けたのは・・・。

紫藤 円しじょう まどか

遥の兄、高野 要たつの かなめの婚約者で遥の姉になる人である。

歳は兄、要と同年の25歳。髪はロングヘアで少し癖つけのあるウェーブがかつた栗色。優しそうな顔というのがぴったりと当てはまるような童顔がとても親しみをもてる女の人だ。

遥の家族構成は両親とは数年前に死に別れており、今は遥と遥の兄、要と二人暮らしなのだ。

因みに両親の両親はともに離れた土地に暮らしており、遥を引き取るとのことだったのだが、ありがたい事にそのころすでに働いていた兄と一緒に暮らすことを提案してくれたのだった。

今は円が仕事終わりでこの家に出向き、遥と要の夕飯の用意をしてくれるので遥はインスタントなジャンクフードに頼らなくても生きていける。

円は近くにある保育園の保母さんで、仕事は遅くなることもあるが大体5、6時には終わるので今時分辺りにはこの家に到着するのである。

そして、要はというとベンチャー企業の上役で仕事は遅くなることが多い。

「うー。いただきますですハイ！クッキープリーズ」

「ふふ。じゃあコーヒー淹れてから一緒にもってくるね」

円さんには何故か甘えちまうんだよねあ・・・。

遥はいけないと思いつつもいつも円の笑顔には甘えてしまっていた。遥の円に対する印象は太陽だった。暖かくていつも眩しい微笑みを絶やさない人だからだろう。

ガシャン・・・

部屋で円の来るのを待っていた遥は何らかの破碎音で部屋を出た。

「円さん？どうかした？」

「・・・あ・・・ご・・・めんなさい」

キッチンを覗いた遥は真っ青な円を見つける。

コーヒーと一緒にバラバラになっているマグカップを素手で拾おうとしている円を制して遥はちりとりと箸を持つてくる。

遥は片付けの最中に円に体調を聞くことにした。

「ねえ、円さん？どうかした？体の調子でも悪いのかな？」

「う、うつん・・・だ、大丈夫・・・あのね、遥くん・・・」

その時、円の言葉を遮るように電話のベルが鳴り響く。

「あ、ごめん。電話だ」

「あ、うん」

遥は受話器を取る。そこから聴こえたのは小さなサイレンと慌ただしい声だった。

「？もしもし？」

「あ！遥くんかい！？要の同僚の佐々木だけど、いいかい？よく聞いて」

「どうしたの？佐々木さん」

「要が、今事故にあって病院に運ばれたんだ」

遥は円の不調の原因に突き当たった。遥は頭の回転がいいほうでよく周りの雰囲気や感情を察しやすい。

きつと携帯で最初に円さんは兄さんの事故を知ったんだろう……。

そう思いながら佐々木の話に耳を傾けた。

「それで……兄さんは大丈夫なの？」

「それが……分からない……」

「分からない？分からないってなんだよ！！！」

遥は訳の分からない感情が込み上げていた。

多分、身内の事故に冷静さを失ったのだろう。佐々木に当たっても仕方の無い話なのだが、そう、事故を伝えた人間が今は何より憎らしい対象だった。

「遥くん。落ち着いて、医者の話だと助かる見込みはあるみたいだから。きつと大丈夫大丈夫だからね？」

「・・・」

そつだ。落ち着け、落ち着くんだ俺。ここで俺が取り乱しても何の意味もないじゃないか。

遥は深呼吸をして受話器を持ち直す。

「ごめん、佐々木さん・・・それで、どこの病院？」

「月丘総合病院。場所わかるかい？俺が迎えに行こうか？円さんもいるんだろ？」

「あ。うん・・・お願いします」

「分かった。十分程度でそっちに着くと思うから用意しておいてくれるかい？」

「はい、分かりました」

遥は受話器を置きながら少し滑稽な笑顔で円に振り向いた。
円もぎこちなく遥を見ている。

「あ、兄貴さ・・・事故ったつて。どじだよね？はは。まあ大丈夫だろうから二人で行って笑ってあげようよ」

「う、うん。そつだね」

「円さん、先連絡きたんでしょ？」

「・・・うん。遥くんはどう伝えようかって・・・うろたえちゃった」

「はは。円さんらしいな」

それから暫らくして玄関のチャイムが鳴る。
準備を終えていた遥と円は玄関へと急いだ。

「ああ、ごめん。渋滞で少し遅くなった」

「いえ。すみません迎えにきてもらってしまつて」

「佐々木さんさつきはごめんね」

「いや、いいんだ遙くん。冷静さを失うのは仕方ないさ。さ、行く」

佐々木は古めいた年代もののジープを愛車にしている。

ジープ特有のドアの高さにロングスカートの円の手を引いて後部座席に遥は乗せた。

「ありがと、遙くん」

「いえいえ。俺の円さんは家のお姫様ですから丁重に扱わないと」

「ふふ。遙くんったら」

「じゃあすぐ病院に着くと思うから、ちょっと我慢してください」

「ああ、タバコね？大丈夫吸ってください」

「悪いね。どうしても吸わないとイライラしちゃうからね」

佐々木は知る人ぞ知るヘビースモーカーだ。吸ってないと事故でも起こさんばかりなので佐々木の車に乗る人はタバコの煙は容認しなければならぬ。

少し窓を開けた空間から紫煙がゴウゴウと吹き飛んでいく。

後部座席には少しタバコ特有の変な匂いが少しするだけで我慢できないことはない。

暫らく車を走らせると病院の看板が目立ちだした。

「そろそろ着くよ」

「はい」

佐々木の言葉に頷きながら答えた。

それから間もなく、病院の正面玄関前に車は停止した。

佐々木は遥と円を先に降ろし、駐車場に止めてくるといって車を発車させた。

「・・・円さん？」

「え？どうしたの？遙くん」

「え・・・？いや。じゃあ行こうか」

「うん」

遙は円の手がずっと震えているのを見てしまった。

それは寒さで震えているのではないことは誰にでも分かることだった。

病院に入る前に遙は視線を感じて振り返る。

そこには何故か懐かしさを感じる少女が月明かりに照らされて、黒い喪服のような格好でこちらを見つめながら立っていた。

「どうしたの？」

「え？」

円を振り返った瞬間にその少女は霞のように消え去っていた。

一瞬夢かと思うほどの事だったので遙はあえて少女のことを円に訊くことなく病院へ入った。

それから数時間が経ち、手術中の赤いランプが消えた。

備え付けのベンチに座った三人に医者が深刻そうにこちらへ向ってくる。

結果を言えば、遙の兄、高野 要は死んだ。

病院に運び込まれた時にはもう助からないと思われるほどの怪我だったそうだ。

そう、そして結局助からなかった。

「最善を尽くしましたが・・・」

医者の言葉が耳を通り抜ける。

円の足が力を失い崩れ落ちるのを佐々木が支えた。

遥は助けられなかった医者を殴り飛ばしたかった。もしくは事故を起こした人物を探し出し殺してやりたいとも思った。

だが、遥は円を案じ、震える拳を抑える。

それから冷たくなった兄、要の姿を3人で見つめた。

真っ白なシャツに包まれた真っ白な要の姿を見て、遥は思う。

どうして円さんを置いていつちまうんだよ・・・なあ兄貴！？

俺はどうでもいいんだ・・・なあ兄貴・・・兄貴は円さんを幸せにしなきゃならなかったんじゃないのかよ！？なあ・・・何とか言えよ！！

食いしばった奥歯から血が滲み口内に血の味が広がった。

遥はどこか感情のない声で二人に振り返り、笑顔で言った。

「帰ろう」

要は轢き逃げに合ったということが少し後で分かった。

そして轢き逃げをした人間はまだ捕まっていないということも分かった。

遥はその人間を許すことは出来ないだろう。

もし、警察よりも先に見つけることが出来ようものなら。

そう、自分の手でその人間をコワスだろう。

それから暫らくは葬式などで慌ただしく考え事する時間も無いほどだった。

葬式も滞りなく終わり、落ち着いた時間を遥は自室で過ごしていた。

今日は円が泊まっていくなかった。空き部屋を使ってもらうことにした。

円は遥には涙を見せなかった。

きつと心配させなくなかったのだろうか。

要が死んだ時も、葬式の最中も、二人で話した時も・・・悲しい顔はしても涙だけは見せなかった。

それだけが遥にとっても救いだっただけ。

深夜に遥は目を覚ました。

部屋の電気をつけることなく、喉を潤すためにキッチンに向う。

「う、う・・・あう・・・うう・・・か、なめ・・・さ、ん・・・うう」

心臓が。壊れるかと思った。

遥は要の遺骨を抱いて咽び泣く円の姿を見つけた。

ああ。

と思う。

どうして、円さんが泣かなければならないのだろうか？

暗い感情が心を覆っていく。

どうして兄が死ななければならぬのだろうか？

死ななければならぬのは・・・轢き逃げをした奴じゃないのか？

そう、円さんから・・・俺から兄を奪った奴は・・・死ねばいい。

『そう。じゃあ、命を奪いにいきますか？』

まるで頭に響くような声に遥は驚いて振り返った。

そこにはあの時病院で見かけた少女が立っていた。
円に気付かれない程度の声で少女に話しかける。

「お前・・・誰だ？不法侵入ですよ？てか、何者だ」

『私？私は・・・』

死神。

少女は自分を死神と名乗った。

突拍子もないことだった。

遥は馬鹿馬鹿しいと思いながらも少女に言った。

「なんだよ。じゃあ俺の魂と引き換えに兄貴を殺した奴を殺してくれるってのか？」

『魂なんて、いらない。貴方は私のパートナーになればいい』

少女は言った。

自分の協力者となつて死神家業を手伝えと。

そうするならば、自分の願いである人物を殺してくれると。

遥は一瞬何か考えようとしたが、首を振って口元を歪めた。

「ああ。分かった。俺は今日から死神だ」

第一死：死神（後書き）

どうもー神楽です。

新たにこんなヘンテコなものを書いています。

楽しんでいただければ幸いです。

更新遅いかもしれませんがどうかどうか温かい目でみてくれると助かります。

では、また次の話であいませう！

第二死：契約

朝を告げる日差しや、小鳥達の囀りに遙は目を覚ました。

気持ちのいい目覚めに昨日見たのは悪い夢だったのではないかと思うほどだった。

だが、そうではない。

遙のコタツに入ってベッドを見つめる瞳に挨拶をする。

「お、おはよう」

『・・・』

挨拶をした対象の人はこちらを見ているが無言である。

遙は少しむっとした顔でもう一度挨拶をした。

「おはよう」

『何度も言わなくても分かるよ』

「だったら返事くらいしろ」

『・・・』

マタ無言デス力？

相変わらず喪服のような服を着ているが喪服とは違うのは夜では分りにくかったが皮で拵えられた服だった。おそらくは特注だろう。髪は少し栗色がかった滑らかな絹のような触り心地のよさそうな髪である。

その髪は肩口で切り揃えられており人形のような印象を与える。

こちらを見つめる瞳は人間では到底カラーコンタクトでもないかぎりありえない赤い瞳だ。

大人びた表情が少女の外見とギャップを感じさせる浮世離れした存在である。

「そついや、お前・・・名前は？」

そつやっているうちに部屋を控えめにノックする音が聴こえた。

「遙くん？起きてる？」

「お、起きてますですはい！すぐいくからね、ね」

『何を慌てているんです？』

「黙れ、黙れ。しーだしー！」

『しい？椎^{しい}の出汁^{だし}？』

「何言つてんだ！静かにしろっつってんじゃこの天然温泉！」

ガチャリと部屋のドアが開く。

ああ、もうだめだ。どう説明したらいいのかわからんぜよ。

「ああ、ちゃんと起きてますね。じゃあ朝食用意してるから着替えたら来てね」

「あ、うん」

まるで円は目の前にいる少女を見えないかのように少女の向こうのベッドにいる遙を見てから部屋を閉めた。

「あ、れ？」

『何か不可解な点でもありましたか？』

「お前つてさ。俺にしか見えてないとかそついうの？」

『私は死に近いものにしか見えません』

あー。そうなんですかあ・・・

「えー！？じゃあ俺って死ぬの？いつ！？何時何分何秒！？」

『それから、私自身が姿を見せることを容認した人には見えます』
「・・・それ先言つて？まじで。心臓に悪いから」

そう言いながらほつとした遥は学校へ行く準備をし始めた。
制服を着て鞆に教科書を詰め込む。

その作業を見つめていた少女が不意に口を開いた。

『何をしているんです？』

「何って、学校行く支度だよ」

『・・・月夜^{つくよ}』

「へ？」

『私の名を訊いたでしょう、先程』

「うわ。超マイペースだな君は」

顔を顰めつつも遥は自分の自己紹介を始めた。

「俺は遥。高野 遥。17歳で高校生」

『・・・遥。私、月夜。17歳で死神』

「へえ。同年なのか」

『そうね』

月夜は皮肉げに笑顔を浮かべた。

支度を終えた遥は部屋を出ようとドアに手を掛ける。

『学校へ行くといっていましたね？』

「ああ。行くよ？それがなにか？」

『私の仕事を手伝うと契約したはずでしょう？』

「いや、学校終ってからね？」

遥は自分で言っておいて滑稽な台詞だと思った。学校が終ったら死

神の仕事を手伝う。

何と滑稽な台詞だろうか。

月夜は遥を挑発するような台詞を吐く。

『その程度の感情ですか？貴方が兄の仇に抱いた殺意は』

「な、に？」

『聞こえませんでしたか？その程度の――』

「黙れ」

目の前が真っ暗になりそうなほど途方も無い怒りが込み上げてくる。出ようとしたドアから手を離し、月夜を振り返る。

その目は怒りに燃える脅威的な殺意を抱いた感情を湛えていた。

「二度と、そんな台詞を吐くな。どんな手を使ってでもお前でも口ス」

『・・・出来ますか？』

「ああ、俺は出来ると信じている」

『・・・分かりました。二度と言いません。貴方を敵に回すと厄介そうですしね』

「・・・学校へ行く振りだけはする。それでいいだろ」

『分かりました。それでは玄関で待っています』

月夜を振り返らず居間へと向った。

深呼吸をした。

居間へと入る前にこの暗い感情を少しでも抑えなければならぬ。円は遥の表情を汲み取りやすい。保母さんをやっている職柄なのかはわからないがほんの少しの表情の変化などで体調や感情を読み取ってしまうほどののだ。

「おはよう。円さん」

「おはよう、支度に時間かかったね。二度寝したんじゃないでしょうね？ふふ」

円は少しだけ遙を窺めるように言った後微笑む。
朝食はオムレツと手作りのロールパン、それにサラダの盛り合わせだった。

遙が美味しそうに食べるのを頬杖について微笑んで見つめている。
いつも通りの雰囲気だ。それもこれで・・・最後になるだろう。
遙はそう思う。

切り出すのは自分だ。

「円さん」

「ん・・・？何か嫌いなものでもあった？」

「違うよ。ちよつと・・・話があるんだ」

いつになく遙の辛そうな表情に円は一瞬悲しそうな顔をした。
その後に続く言葉を円は知っているのかもしれない。
それでも遙は言わなければならなかった。

「もう。この家には来ないでいいんだ・・・兄貴は・・・もういいんだ。円さんは別の幸せを・・・見つけて欲しい・・・幸せになつて欲しいんだ・・・姉さん」

「・・・遙くん・・・」

「そう、これつきり・・・もう・・・来ないでくれるかな」

円は今度ははつきりと遙に対して見せる。

瞳から零した雫。

胸が潰れるかと思うほどの苦しさ。

どうその先を言えばいいのかさえ分からなくなった。

しかし、円の口から出たのは遙にとって意外すぎるものだった。

「やだ」

「へ？」

円の口から出たとは思えないとても子供っぽい台詞に素っ頓狂な声を出してしまう。

「やだ。やっと姉さんって呼んでくれたのにこれっきりなんて絶対やだからね？今もこれからもずっと私は遙くんの・・・遙の姉さんなんだから」

「・・・円さ・・・姉さん」

二人は顔を見合わせて笑った。

それが当然とも思えた。

そう、要がいなくなっただから全てをリセットするなんて虫のいい話だったのだ。

今だって、そしてこれからも円は遙の姉なのだから。

朝食を済ませていつも通り二人で玄関へ出る。

恒例行事みたいなものだ。

「行ってきます。行ってらっしゃい」

「行ってきます。行ってらっしゃい」

二人はハミングするかのように同じ台詞を同じタイミングで言う。そして二人は別々に歩き出した。

「待たせたかな？」

『いえ。特に時間は有していませんよ』

「それで？俺は何をすればいいんだ」

『貴方は死に行く魂を安らかにして欲しいの』
「何だ・・・？それは」

死神と名乗る月夜の台詞とは思えないほど意外な言葉が吐いて出る。

『死神は死を迎える魂を狩る者。恨み辛みを残しては魂は地から離れることなく悪霊となる。そうなつてしまえば最早私達死神では狩ることは不可能なの』

「だから、俺が死に際の相手の心残りやら悩みやらを取り去れってことなのか？」

『そう』

「それを手伝えば、兄貴を殺した相手を殺してくれるってのかよ」
『ええ、そう』

遥の質問に淡々と答える月夜。

遥は一番気になった質問を繰り返した。

「その。兄貴を殺した相手も心残りやら悩みを取り除いた後とか言うんじゃないだろうな？」

『どうして欲しいの？』

「苦しんで苦しんで死ねばいい」

『そう、それじゃその通りにしてあげます』

まるでどうでもいいことのように月夜は答えた。

だが、遥にとってはその答えはとても都合のいいものだった。
だから遥は月夜に協力する。

そう、覚悟は要が死に、円の涙を見たあの日から出来ていた。

俺は死神になったのだから・・・

第三死：取引

「ふう……春は……遠いの……」

肌寒い公園のベンチでぼつりと背中を丸めた老人が何かしら呟いた。
遠野 とあの げんはちろう 元八郎今年で85になる老人だ。

元八郎は春を待っていた。

その理由は元八郎にしか分からない。

『あの老人よ。もうすぐ……死ぬ。名は遠野 元八郎。享年85歳』

「まあ、元氣なさげな顔してるな……あのじーさん」

学生服のポケットに手をつ突っ込んだまま猫背で身体を震わせながら
遙は呟いた。

『さ、あの人の所へ行きますよ』

「あ、うん」

月夜は老人の座っているベンチに向って歩を刻む。
それに付き添うように遙は歩を進めた。

「ん？どうしたんだい学生さん……と妹さんかい？」

「え？どうして……」

見えるのかと口に出す寸前で遙は口を閉ざす。

（そうか、死が近いんだ……このじーさん……本当に死ぬんだ……）

突きつけられた事実には遙の顔が歪む。

黙ってしまった遙達を怪訝そうに元八郎は見やり、やがてはつとした表情で口を開いた。

「まさか・・・おんしら・・・!？」

（何だ！？俺達が死神だつて気付かれた！？つてそうだとしたら何て突拍子もない勘の持ち主だよっ!）

心拍数が上がった遙を知つてか知らずか月夜は無表情で黙つたままだ。

「流行の、オラオラ詐欺かい!？」

（勘弁してください。おじーさん。俺だよ俺つていいましたかね？てかオラオラじゃくて、俺俺なんだろうけども、どこぞの尻尾が生えたとんがり頭で黒髪から金髪に早変わりする人物はオラつていつているから間違いじゃないのだろう・・・か？）

遙は心の中で突っ込みながら、無表情な月夜を見た。

月夜は遙の視線に気付いたらしくこちらを見て口を開いた。

『オラオラ詐欺なの？貴方』

「俺？いや、チガイマスヨ？ていうか何言ってるの？オマエ」

『だってこの人がオラオラ詐欺なのかと聞いていたから・・・貴方オラオラ詐欺師なのかと思つて』

（よし、落ち着こう俺。この最高品質の天然温泉娘はとりあえず置いてこうじゃないか俺）

遙は一呼吸置いて元八郎に向き直った。

「直球で訊くけども、おじーさん。何か心残りなんつーものはある？」

「ん・・・？そんなものありやあせんよ。わしや天寿を全うするんに何も心残りなんぞありやあせん。可愛い孫もこの手に抱き幸せじやて」

「つて言つてますけど？」

元八郎の言葉尻にそう付け加えて遙は月夜を見た。

月夜は表情を微塵も変えることなく淡々と元八郎に言った。

『今日死ぬとしても？』

「お、おい」

『貴方がそういうのは残る人生がまだあると思っっているから、今日死ぬとしても何の悔いも残らず死ねるかしら？』

「お嬢ちゃん面白いことをいうんじゃない。そうさの・・・今日死ぬとしたら・・・心残りがあるのう・・・」

ふうつと寂しげな顔で空を見上げた元八郎に遙が質問する。

「それは何です？」

「春・・・春じゃよ・・・」

「へ？・・・春って春が心残りってこと？」

「はっはっは。わしの心残りはなあ、桜じゃ・・・死ぬ前に桜を眺めたいんじゃないよ・・・」

そんな些細なこと・・・そう思う。だが死に行くものがどう思うか、それは死に行くものにしか分からない。

些細、些細ではある。

だが、今日死ぬのならそれは不可能で奇跡でも起こらぬ限り叶わない夢。

遙はいきなり難題にぶち当たったと顔を顰める。

『さあ、貴方の出番でしょう?』

「無茶言つなあ・・・」

さらっと言つてのける月夜を横目に遙は携帯を取り出した。

ディスプレイに表れた名前を流し読みながらある名前でスクロールを止めた。

「・・・嫌なんだけどね?この際奇跡でも起こせそうな人物はこれ以外思いつかんわ」

『なんとか出来るみたいですね?』

「さあ、そら分らんが・・・月夜。おじーさんと一緒にいてくれる?これ、俺の予備の携帯渡しとくから。何とかできたら電話する」
『わかりました、待っていきましょう。でも忘れないで、もうあまり時間はないわ』

元八郎は目の前で繰り広げられている会話について行けずに呆然とするしかなかった。

ただ、元八郎は自分に構う人間がいなくなった今日この頃でこのような若者が自分に対して興味を持っているということが嬉しかった。だから、元八郎はこの月夜という少女と一緒に遙を待つことにしたのだった。

自分が今日死ぬなどと突拍子もないことを信じたわけではないが、それならそれでこの子供達は何をしてくれるのやと好奇心をもったのだ。

「さあてと・・・苦手なんだよなあ・・・あいつ」

公園をでて携帯を取り出し、ディスプレイに記された番号に連絡をする。

プルルル・・・

と2回ほどコールを鳴らしたと思った矢先、女の子の声が耳に届いた。

「はい」

簡潔で淡々とした小さいとも大きいとも言えない声をする。遥は息を吸って吐いて名乗る。

「あ、高野だけど」

「ええ、分かります。今日学校へ来てませんか？無断欠席はいただけませんよ？」

有無を言わせない声色が遥に後悔を齎す。もたら

（ああ、やっぱり御堂に頼むのはやめようかなあ）

御堂 みどう
響 ひびき

御堂財閥の一人娘であり、遥の通う月島高校の生徒会長である。

同じクラスで、彼女は孤立してはいるものの、いじめられるなんて在り得ない存在。

男性からも女性からも驚異的な人気を誇っており、毎年学園祭で行われる人気投票では常に一位を受賞している。

少し淡い藍色の髪を腰まで伸ばし、常に冷静沈着な表情。素晴らしく整った美しい顔がその冷静さにとても合っている。

この月島市で御堂財閥に楯突ける者は存在しない。

絶対なる権力者だ。

だからこそ、奇跡や夢物語も彼女に頼めば叶うこともある。

だが、それには代償が必要だ。

彼女は慈善事業は一切しない。彼女は力を貸してくれる。だが、それは貸しである。

こちらとしてはある意味とんでもない借りを作ることに相違ない。
彼女は取り立てる。彼女のタイミングで彼女に見合う力をその時返さなければならぬ。
それが掟だ。

遥は彼女、御堂 響と仲が悪いわけではないが、今のところ貸し借りはないのだ。

だからこそ友達という枠で存在してはいるが、それがどう転ぶかわからない取引だ、遥が躊躇うのも仕方ないことだった。
しかし、覚悟を決めて遥は話を切り出す。

「あのさ、御堂。頼みがある」
「・・・唐突ですね。伺いましょう」

今現在時刻は9時5分。確実に授業中にも拘らず彼女は携帯に出ている。

それは教師も何も言えない絶対権力者だからだ。

「春という空間と満開の桜を用意出来るか？」
「・・・少し時間が掛かりますが、出来ないこともありません」

（ビンゴだ）

遥は思う。この女に出来ないことがあるのだろうか。
響は短く息を吐き話を続ける。

「どれくらいかかる？」
「おそらく数時間」
「今日中に可能か？」
「ええ。それは可能です」

この後俺は頼むと一言言えいい。

そうすれば、死神の仕事はスムーズに終る・・・のかもしれない。
その代わり俺は彼女に隠し事は出来ない。
それがルールだ。

「・・・頼む」

ひりつく喉をそのままに掠れた声でそれを言う。
電話の向こうで微かに響が笑った気がした。

「ええ。分かりました。それでは、それが必要な理由を訊きましよう」

そんなのはたった一言で事足りる。

遥はその一言を言うのに躊躇う。

良いのだろうか？と。

このような超常的な事柄を無闇に人に話す行為。許されるのかと。

だが、この先、俺の望みを叶える為、この女の力が必要なのは事実。
遥は鼻を鳴らすように笑った。

そう、俺はどんなことがあっても犯人を許さない。

その過程に何があるうともコロシテヤル。

そう心に誓ったのだ。

だったら悩むことなどない。

遥は言う。

その理由を。

「俺が、死神になったからだ」

「・・・これは、面白いことになりましたね」

疑うことも馬鹿にすることもなく、響は少しの間の後淡々と言った。

「分かりました。準備を始めます。今度詳しくお話を伺うことにしましょう」

「ああ、頼んだ」

溜息を吐きながら遙は電源のボタンを一度押した。

緊張から解き放たれたように体がふらふらとした。

近くの電柱に寄り添うようにずるずると腰を下ろした。

「分かってるさ・・・俺は・・・どんな奴だって利用してやる」

ふと見上げた空は遙の心とは裏腹に晴れやかに雲1つない青空だった。

第四死：神聖

携帯の電源ボタンを一回押し、響は授業に戻る。

教師は響が視界に入っているにも拘らず授業を続行している。

注意をする気配もなければ嫌な顔1つしない。

響は遥から電話が掛かってきた時は意外だった。

一番自分に頼ることを嫌う人物が自分に頼みを申し込んできた。その事実思わずほんの少し誰にも分からない程度頬を緩めた。

（ふふ。あの高野 遥が私を頼る時が来るとは意外でした・・・）

響は授業を聞くのを止めた。

筆記用具諸々を机にしまい、鞆をもって立ち上がる。

勿論今はまだ授業中だ。

「少し所用が出来ました。少し出かけます」

「あ、ああ。それなら仕方ないな。分かった、行きなさい」

「それでは」

教師はそれだけ言うってから授業を再開する。

この授業もその後控える授業も響は欠席扱いにはならない。

そう、決まっているのだ。

彼女はこの財閥の力が及ぶ地域では絶対的な存在にほかならない。

教室を出た響は携帯を取り出し、メイドを呼ぶ。

一度のコールで反応したらしく、電話の向こうから慌ただしい声が響いた。

「はあいはい！響様。何か御用ですかあ？」

「霧。春の空間と満開の桜を用意しなさい。至急です」

「はあい！予算は如何ほど使ってもよろしいでしょうか？」

霧と呼ばれたメイドが理由すら訊くことなく予算を聞いた。

御堂財閥にとつてこの真冬に春の空間と満開の桜を用意するのに無理難題という言葉など存在しないのだろう。

「問いません。ただし、時間は急を要します。いいですね？」

「はあいはい！了解しましたあゝでわ用意します」

霧は御堂財閥に属するメイドチーフである。

苗字も本名も無い。年齢すら自分にも分からないだろう。

ただ、年の頃は20代前半といったところだろうか。

存在を許されるのは御堂に仕えることによってだけだろう。

戸籍も全て抹消され、ただある肩書きは御堂財閥のメイド。それだけである。

髪はボブカットで顔は一見美人だが、外面だけで内面を図れるものではない。

彼女は御堂財閥にとってプラスになるのであれば殺人すら禁じ手にはならない。

絶対の主人は御堂財閥の一人娘響だけである。

それに仇なす者は何であろうと潰すであろう。完膚なきまでに。

霧は少しだけ唇を舐めて、メイド無線をオンラインに繋ぐ。

御堂財閥に属するメイド組織には二通りある。

世間に公表しても問題ない普通のメイドの務めをするフォーワズ。

世間に公開することのない裏の仕事をこなすアウズ。

霧はフォーワズのトップではあるが、アウズにも命令を下すことが出来る。

それは響が与えた特権でもあった。

霧の部屋にはいつでも両組織に連絡を下せる機材が設置してある。

「フォーワズ。お嬢様の命です。至急、春という空間に満開の桜を用意する手筈を整えなさい。いいですか、予算に限度などありません。温室などというチャチな真似をするわけにはいきません。本物以上の春を用意なさい」

その言葉で財閥の全ての権力が遥の頼みを叶えるために動くのだった。

遥は月夜に連絡もせず、一人林道に入っていた。

月島市は色濃く自然の残る土地でこのような林道が数多く残されている。

そしてこの林道の奥には遥の一番好きであり、嫌いな思い出の場所があった。

華の種類は知らない。冬にしか見ることのない、太陽の光では輝くことない薄青色の小さな華。遥はそれを雪の華と呼んでいた。

それは小さなスペースを囲むように咲いている。

遥はそのスペースに踏み込む。

そう、ここは遥と、もう一人の人間しか踏み込んで是不ならない。

遥にとって神聖な場所なのだ。

感慨に耽る。

苦しくて、それでも未だにドキドキする。

淡く記憶を揺さぶる。

「ねえハルちゃん。ここはハルちゃんと私の秘密の場所だからね？」

「うん。分かってる。誰にも言わない」

どうしてか、彼女の名前も姿もおぼろげで分からない。

もうすでに数年も前の話だ。

分からなくて当然なのか・・・それとも記憶を失っていつているのか・・・。

「ねえ、ハルちゃん、ハルちゃんってば・・・」

「ん？なあに——ちゃん」

今俺は・・・彼女の名を呼んだはずなのに・・・どうして彼女の名が分からないのだろうか？

どうして俺は彼女を忘れていくのだろう・・・。

どうして・・・。

ワスレテイクノダロウ・・・？

「どうしたの？君。こんなところで寝てたら風邪ひくよ？」

今のは記憶の中の会話じゃなく、現実には遙に話しかけてきた声だ。遙は煩わしそうに顔を声の方へと向ける。

ショートカットの清潔感溢れる栗色の髪を風に少し靡かせて、人懐っこい幼さを残した顔をした女性が微笑んでいる。

ダウンジャケットを羽織っているものの太股までのタイトスカートを身に着けている。

「寝てはいない」

少しぶっきらぼうに放つ言葉、遥にとってこの場所は神聖な場所、知らない人間に来て欲しくはないのだろう。

「そう。でも目を閉じてたから寝てるのかと思っちゃった」
「・・・」

それで会話は終る。この女性も何処かへ行ってくれるだろう。

遥はそう思ったのだが、意に反して女性は言葉を紡ぐ。

「ねえねえ、ここってすごく素敵な場所よね？私昔から大好きなの」
「・・・」

（昔から？・・・くそ、ここは・・・俺とあの子の場所なんだ・・・オマエが昔から・・・だと？フザケルナ、ふざけるなよ）

遥は気性の荒いほうではない、だが、自分の大切なものを侵食する者には容赦は無い。

どす黒い感情が遥の心を覆う。

（落ち着け。そう、この女は知らないだけだ。知らないだけ、罪は無いだろう。ここで何をする積りだ。女を殴り飛ばす？そんなことしても意味は無い。落ち着け、俺はオマエと会話したい気分じゃないんだ。何処かへ行ってくれ）

次々と頭に思考が浮かんでは消える。

女性が口を開く瞬間に遥の携帯が鳴り響いた。

遥は携帯を取り出して受話ボタンを押した。

「高野 遥。準備は整いました。屋敷のほうへ来てください場所は言わなくても分かりますね？」

「ああ、あんな目立つ場所この街に住んでるもので分からない奴いないだろ」

「そうですね。では、屋敷で待っています」

会話はそれで終る。

携帯をしまい、遥はこの場所を後にすることにした。

遥が立ち去る寸前女性は微笑んで言う。

「ねえ、君、ここ好きなの？」

遥は一瞬振り向いてから言う。

「嫌いだよ」

それは本当。

でも嘘。

どっちでもあるのだ。

大好きで、大嫌いな場所。

イツカラか、そうなってしまった。

「そう。私は好きだよ、あ、私、燕。花斑。燕。君は？」
「・・・遥。高野 遥」

燕が何か言う前に遙は逃げ去るように走り去った。
走っていく遙を呆然と見ながら燕は薄く笑う。

「・・・ふふ。面白い子」

燕は遙にとって神聖な場所であるその場所へと踏み込む。
そこから空を見上げる。

とても爽やかな青い空が広がっている。

ずっと昔からこの場所は燕にとって大好きで大切な場所なのだ。

燕がさつき遙がそうしてたように少し寝転がって目を閉じる。

少し肌寒い冷たい風が頬を撫っていた。

第五死：決意

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ」

僕は約束の場所に走る。

息が切れてすぐ胸が苦しい。

だけど、心はときどきと躍るように楽しい。

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ」

夕暮れに染まるオレンジ色の景色が僕の高揚した顔もオレンジ色に染める。

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・」

もう少しで約束の場所だ。

僕は少し走るのを止めて速度を緩めるように歩き出した。

君の歌が聴こえる。

僕の胸はどんと高鳴ってく。

「・・・——」

「・・・あ、ハルちゃん」

僕は君が大好きで、君は僕が大好きと言ってくれる。

僕は君のためなら何でも出来るだろう。

そう、何でも出来る。

元八郎の隣に座った月夜の手に持った携帯が鳴った。

メロデーはとても綺麗で聴いたことは無いようなオリジナルの曲だ。

『はい』

「ああ、用意が出来た。そのじいさんの心残りを取り除けるかどうかはまだわからんが・・・まあ、春と桜、用意できたよ」

『分かりました、では、どこで落ち合いましょうか？』

「月島の幽玄通りって分かるか？そこの近くにいます」

『ええ、分かりました。では後ほど』

月夜はたどたどしく電源ボタンを押して会話を終了させた。

元八郎に向き直り、月夜は口を開く。

『用意が出来たそうですよ。貴方の望むものかどうかはまだ分からないのですが、判断は貴方に任せます』

「・・・ふむ。面白い子達じゃの・・・わかったわかった付き合おう」

元八郎は重い腰を上げて月夜の後をついて歩き出した。

幽玄通りと言えば、月島市に住んでいるもので知らない人間はいない。この月島の絶対の覇者、御堂財閥の屋敷がある通りなのだ。そして、この周りには御堂との血縁関係などがなければ住むことは許されていない。

言うなればこの幽玄通りは御堂財閥の根城といってもいいだろう。

月夜が幽玄通りに入った頃、遙は屋敷の前に立っていた。

馬鹿でかい正門の前に立つと否応無く自分が凡人であると知らしめさせられる。

溜息を吐きながら遙は呼び鈴を押した。

「はい、御堂ですが。どちら様でしょうか？」

呼び鈴の上に備え付けられたモニターにメイド服を着込んだ女性が映し出される。

うん、もうこの時点で金持ち丸出した。

「えーと、御堂さんの・・・響さんのクラスメートです。響さんに呼ばれているんですが」

「ああ、ええ。伺っております。高野 遙様ですね？どうぞ、お通りください」

これまた金持ち丸出しで自動で正門が開いたと思ったら、十数人のメイドが左右に並んでお辞儀をしていた。

（うーん。It、a fantastic！こんな風景どんな悪どいことしたら見れますか・・・教えてくださいマジで！！）

一番前に控えていたメイドが一步前に出てから遙に会釈して口を開

く。

「どうぞこちらへ、高野 遥様。お嬢様がお待ちになっております」
「あ、はい・・・ども・・・あー、えっと連れが来るんでちょっと待ってもらえます？」

「はい、分かりました。では椅子を用意致します」

「い、いや。大丈夫だから」

「そうですか・・・ではお待ちします」

そう言つてメイドは一步下がつて元の位置に戻つた。

遥は律儀な人だと思ひながら腕を組んで正門の前で突っ立っていた。

ほどなくしてメイド達にはおじいさんがキョロキョロとしながらこちらに向つてくる様子が目に止まつた。

遥はメイド達には見えない月夜に向つて手招きをしながら呼んだ。

「おーい、こっちだこっち」

『こちらに用意してあるのですか？』

「ああ。まあ問題ないだろ・・・多分」

「ええ、問題などありません」

不意に後ろから声を発せられ遥は不覚にも驚いてしまった。

「・・・御堂か・・・驚かすなよ」

「驚かそうと思つたわけではありませんが？それでは案内します。こちらについて来てください」

「分かった。じゃあじーさんいこうぜ」

「うむ・・・」

響は遙達を先導して立派過ぎるといつても過言ではない庭園へと案内した。
そこには季節にそぐわない花々が咲き乱れてはいるが肝心の春と桜はなかった。

「ふむ・・・確かに春らしいが・・・わしが見たいのは春の桜じゃ・・・」

「えっと、御堂・・・これが用意したもの？」

響はふつと口元を歪めていった。

「これは御堂家の庭園ですよ。案内はまだ終わっていません」

響はそう言つと地面を指さした。

地響きにも似た音が響き、地面がスライドしていく。
現れたのはどうやら地下への階段らしい。

「うわ！秘密結社みたいだなっ！悪の組織っぽいな！」
「・・・そーですね」

「高野 遥。私の屋敷は悪の組織ぽいのですか？」

「・・・いや、冗談・・・ですよ・・・？」

響は無言で地下へと降りていく。
着いて来いということだろう。

遙達は響の後を追った。

地下には広大な広さがあり、シャンデリアやランプなどが随所に設置しており、薄暗いという言葉は存在しない。

その奥に装飾に富んだ赤い扉がある。

響はそこに向って一直線に進む。

どうやらそこが響の用意したもののある場所なのだろう。

赤い扉が重々しい音を立てて開かれる。

そこから眩しい光や柔らかな陽光に爽やかな風が現れる。

まるで魔法だ。

地下のはずなのに太陽に青空、それから柔らかな地面に咲き誇る青々しい草花。

そして中央に誇らしげに咲き誇り白桃色の花びらを舞い散らす巨大な桜。

元八郎は驚愕し、桜へと頼りない足取りで向う。

「ああ、ああ。待っていたんだろう？初恵^{はつえ}・・・長いことまたせたなあ・・・悪かったなあ・・・」

桜にたどり着いた元八郎は糸が切れた人形のようになんの脈絡もなく崩れ折れる。

だが、それは響にしかそう見えない。

月夜と遥には薄く淡い姿で老人と老婆が抱き合う姿が眼に映っている。

光に包まれるその様子は神秘的でとても美しい。

それが魂なのだろう。

遥はそう確信した。

月夜は静かに老人達のほうへと歩を進める。

やがて老人達の傍にまで来た月夜は薄く微笑む。

手にはいつからか持っていた黒く光る凶器があった。

死神の鎌。そう。死神が持っているのだから死神の鎌なのだろう。

「——っ」

『では、安らかに』

遙が走り出す前に月夜は死神の鎌を抱き合う老人に振り下ろす。

「やめろおおおっ」

ザシュ。

薄く淡い姿が霧のように月夜の持つ鎌に吸い込まれていく。

（どうして俺はやめると叫ぶ？）

遙は前に出した手をゆっくりと下ろす。

（幸せそうだったから？）

何が起こっているかも分からないのに飄々とした表情で桜を見つめる響を振り返る。

（もう、俺は・・・戻らない。そう決めたじゃないか）

無表情にも似た響に遙は薄く口元を歪める。

「死神は貴方にしか見えないのですね？」

「いや、俺と死期の近いやつに見える」

響の質問に正確に答える。

隠し事をする意味は無い。

遥はこれからも響の協力が必要だった。

魔法のような財力それは絶対的な力に相違ない。
だからこそ遥はこう言う。

「これからもよろしく頼む」

そう言った遥に子供のような笑みを浮かべ響は頷いた。

「ええ。よろしく頼みましょう」

第五死：決意（後書き）

すいません。随分と間があいてしまいました・・・。
さに最近執筆できませんががんばります。
どうか温かい目で見てくれます・・・？
がんばりますのでお願いします・・・
・TTT

第六死：架空

「な、んで・・・」

赤く赤く染まった雪。

止まらない流血。

彼女の歌は聴こえない。

彼女はもう歌うことはない。

どうして彼女が死ななければならぬのだろうか？

「なあ・・・——？・・・どうして、何も言ってくれないんだよ」

雪が舞い落ちる。

ひらひらと。

月夜に薄く光る花びらのように・・・。

僕は・・・彼女の冷たくなっていく身体を抱きしめて泣いた。

カーテン越しに入る光が弱弱い。
遙はゆっくりと目を覚まし、ベッドから身を起こしカーテンに手をかける。

「雪・・・か」

カーテンを開くとチラチラと舞う雪が目映った。

遙は雪が嫌いだ。

理由はよく覚えていない。

理由なんてあったのかなかったのかも今では分からない始末だ。

「遙君。起きてる？」

「あ、うん起きてマンセー！」

ガチャッとドアを開けて円は微笑んだ。

「朝から元気ね、遙君って」

「元気が取り得ですからねえ」

円はふっと寂しげな顔をしたが、すぐに笑顔で言う。

「朝食できてるよ。着替えて朝ごはんにしましょうね」

「あ、うん分かった」

円が部屋を出て行くと共に遙は制服に袖を通した。
ふと部屋の隅に目をやる。

月夜は何をするでもなく只そこに佇んでいる。

「いつまで突っ立ってるんだよ・・・座ればいいだろ？てか布団用意してやったのに使わなかったんだな？寝てないのか？」

『死者に睡眠は必要です』

「・・・死者って・・・死神だろう？」

『死者から成るもの、それが死神です』

遥はそれ以上の質問をすることは無く、さっさと着替えを済ませ、居間に向った。

円との朝食を終え、少し世間話をして玄関に出る。

「行ってきます」

「行ってきます」

いつも通り二人は逆方向に歩き出す。

半ば儀式的になってきた朝の習慣。

二人を家族という擬似的な気持ちにさせてくれる儀式。

円と別れ、登校する遥の前に同じ学校の制服を着た女性が歩いてくる。

だが、見覚えのある顔に少し違和感を感じて怪訝そうに遥は女性を見た。

「君・・・ああ、遥君だったよね？同じ学校だったんだ？えっと・・・そうすると後輩君なのかな？」

「・・・花斑さん・・・でしたね」

「そう、覚えててくれたんだね。嬉しいな。燕でいいよ」

燕はにこりと微笑んで手を差し出す。

握手をしろということだろうか。

遥は少し沈黙し、ゆっくりと握手を交わした。

「そういえば、じゃあ君は昨日お休みしたにもかかわらず遊んでい

たのかしら？」

「そういう先輩はどうなんですか」

「私？私は一応学校のほうの授業はもう終わってるしね。卒業も確定してるし・・・問題あるかしら？」

無然に応えた遥をあしらうかのように燕はそう応えた。

遥はなんとなくこの女性に警戒心を抱いてしまっていた。

あった場所があ場所だからだろうか？

それとももっとほかの理由があるのだろうか？

それは遥自身にもはつきりとは分らないでいた。

「じゃあ、先輩。俺急ぐから」

「あら？いいじゃないどうせ一緒の道でしょう？まだ時間は余裕よ？一緒に行きましょう」

何が目的なのだろうか？

ただ、先輩が面白い後輩と一緒に登校しようと申し出る。遥はそれだけの筈なのにどこか異質な部分を捨てきれないでいる。

（この人は何かオカシイ）

そう心が警鐘を鳴らしているかのようだった。

頷くこと無く遥は燕の脇をすり抜けるように前にでて歩き始めた。それに習うように燕も遥の歩調に合わせて歩き始める。

「ねえ、こんな話知ってる？」

不意に燕は遥に話しかける。

遥は顔を向けることなくただ歩を進める。

「唯一の存在。例えば人間でいうなら人口50億人以上いるよね？
その中でたった一人の生存者。それは唯一の存在。Oneよね？そ
うなったらどんな願いでも叶うとしたら貴方ならどうすると思う？」
「・・・何の話です？」

遥は鬱陶しいとでも言いたげに顰めた顔を向ける。

燕はそれさえも可笑しいとでも言うように笑顔で続ける。

「だから、唯一の存在の話。それに成るためには他の存在は邪魔よ
ね？そうなるでしょう？」

「・・・まあ、そうですね」

「だったら・・・他の存在をどうすれば消せるかしら？殺す？でも
そう簡単に殺させてなどくれないよね？だって向こうだって唯一の
存在になれる権利をもっているのだから」

「・・・朝から物騒な話をするんですね」

うんざりした表情で皮肉を放つものの燕は微笑みを絶やすことなく
話を続ける。

「なら、戦うしかないよね。君なら・・・戦い、存在を勝ち取り願
いを勝ち取りたい？」

「・・・別に」

「あら、IfよIfの話。深刻に考えることなくそうかなあって感
じで答えればいいのに・・・ふふ、でも君らしいかな。私なら、戦
うわ。どんなことでも勝ち取ってみせる」

只の空想の話をしているにはあまりにも真剣すぎる表情をしている
燕に遥は気味の悪さを感じずにはいられなかった。

「ねえ、そう思わない？」

「俺は・・・そうは思わない。それなら自分の大切に思う人まで殺めなきゃいけない」

「そう、そうね。でも一番大切なもの、大切な人が存在していなかったら？」

燕の言葉に背筋に空寒いものが走る。

遥は言葉を詰まらせた。

「・・・っ・・・え？」

「大切なもの・・・存在していなかったら？それを取り戻すことだって出来るのよ？何でも望みが叶うのだから」

確かに燕の言うとおりだろう。

大切な物が存在しなければその存在だって取り戻すことが出来る。

それなら・・・それなら？

俺は・・・戦うだろうか？

いつの間にか燕の話にのめりこむ自分がいることに気付いて遥は堰を払う。

燕は校門が見えた辺りで遥に手を振って走り出した。

「Ifの話も結構面白かったでしょ？じゃあね遥君」

遥は登校時間で人が溢れる校門に向ってだるそうに歩き出した。

第七死：悲魂

『はあ、はあ、はあ』

濃い闇に染まる寂れたビルの屋上。
強い風に髪が弄ばれる。

体中に傷を負い、今にも倒れそうな月夜。

その対面にはせせら笑うように禍々しい鎌を構えた女性。
女性は嘲つかのように口を開く。

『その程度なの？』

と。

月夜は何も応えない。

ただ、杖代わりになっている鎌をゆっくりと振り、構える。

『まだ、やる気なんだ？しぶとさだけはゴキブリ並ね。気持ち悪い子』

足りない。

魂が足りない。

力たる魂の絶対数が足りない。

月夜は焦りを隠せない。

こんなところで朽ち果てるわけにはいかない。

もつと魂を。

私は魂を狩る者。

月夜に振り下ろされる鎌を避けることもせずただ肩に突き刺さる激痛に耐えた。

『！？何を・・・！？』

一瞬驚いた女性の胴を横薙ぎに月夜は思い切り鎌を振りぬき切り裂いた。

『く！！初めから、勝つ気なんてなかったのね！？くっ逃がさない。逃がさない！！』

激痛に崩れ折れそうになる女性の足の健を月夜は切断し、夜の空へと跳躍する。

『・・・ゆる・・・さない・・・お前は絶対に・・・私が・・・』

キンコーンカーン

終業を告げるチャイムで教室内が少し騒がしくなる。

帰りに遊ぶ約束を取り付けるもの、好きなドラマの展開を予想しあうもの。

様々な会話を取り交わす。

「高野 遥」

「お、え？な、何？」

「何ですかその反応は？一婦女子に対するには失礼ではありませんか？」

「あ、す、すまんです・・・で？何か用かな」

響が少し短い溜息を吐き、遥を見つめる。

「用が無ければ話しかけてはいけませんか？」

「え？」

「・・・冗談です。用件は他でもない、死神との面会をしたいと私の私設研究部門の者達が言い出しまして、貴方に”貸し”を返してもらおうかと思ったのです」

遥は少し戸惑ったが、ここで断れば響の援助は受けられないはおろか、きっと何らかの形で報復を喰らうことになる。

それは遥にとってはデメリットでしかない。

「分かった。でも・・・死に近い人か、俺にしか見えないんだぜ？」

だから遥は了承するしかない。

「構いません、貴方が通訳をすれば何の問題もありません」

「・・・分かった。何時くらいに向えばいい？」

「そうですね。16時30分までに屋敷に来てくれれば問題ありません」

遥は声を出さないで頷いてから鞆を抱えて帰宅することにした。

教室を出てから階段を下る頃、遥の苦手な人物に会うことになった。その人物は少し気だるそうに遥に微笑む。

「帰り？」

「ええ。一緒に帰るのは断りますよ？」

「あら、自意識過剰じゃない？ふふ、冗談よ。そんな怖い顔しないで、一緒に帰ろうと思ったのは事実よ。残念だわ」

燕はそう言ってから遥の脇をすり抜けるように階段を下りていった。

「誰と話していたんです？」

「おわ」

急に後ろから声を掛けられ普段には無い驚きで振り返ってしまう。相変わらず無表情で響が無機質に小首を傾げていた。

「いや、上級生と世間話」

「・・・？そうですか」

「えっと、4時半だったよな」

「ええ。そうです。では校門まで一緒にしましょうか」

校門ではリムジンが響を待っていた。

うやうやしく頭を下げる運転手に小さく目配せをし、響は遥を振り返った。

「送りましょうか？」

「いんや、近いし。リムジンには乗ってみたいが御堂と隔離された空間で一緒だとドキドキして襲っちゃいそうだからな。やめときます」

「・・・残念です」

どういう意味で残念なんだろうと遥は一瞬考えたが、響は名残惜しそつも無くさつさとリムジンに乗り込んで帰ってしまった。

「ジョークスルーされると涙がでちゃう。男の子だもん！」

誰に言うでもなく空に向って遥は叫んでいた。

遥が言ったとおり、遥の家は月島高校の生徒の中でトップクラスに近い。

通学路を利用しないのであれば、何とカップラーメンが出来上がる頃には家に到着するというインスタントな距離なのであった。

「ただいま。って誰もいねーよね」

「おかえりなさい」

「つておわっ・・・玄関にいたのね・・・どうした？何か具合悪いんか？」

「別に問題ありません」

玄関に蹲るように居た月夜は冷や汗を拭いながら立ち上がった。それからしばらく何処か虚空を虚ろに見つめていた月夜が不意に遥に視線を戻した。

『仕事です』

「え!？」

遙にとってはこれからの予定が決まっていたので急といえば急な仕事だった。

しかし、死神のパートナーとなつた今は仕事は何より優先しなければならぬと分かっている。

『遙、何か問題がありますか?』

「あー・・・御堂のお嬢様が月夜と対面したいと言つててね。今日の午後4時半に屋敷に呼ばれていた」

『・・・明日以降に回してください。それならば私も協力します』

「オッケ。じゃあ連絡しとく。で?何処に向えばいい?」

白い大きな建物。

掲げているのは赤十字。

数え切れない魂を見取り、救つてきた因果な場所。

「う・・・はあ・・・はあ・・・」

「三咲ちゃん!?!しつかり。がんばつてがんばるのよ!」

さきしま
鷺島 三咲

月島小学校に通う少女。

少し癖毛の黒髪はウェーブがかかり、肩口まで伸ばされている。

幼さの色濃く残る丸い顔に大きな瞳がチャームポイントだろう。

いつもは桃色の頬も今は青ざめピンク色の唇も真っ青に変わり果てていた。

『彼女。鷺島 三咲。享年11歳よ。今日死ぬわ』

「・・・どうして・・・」

個室の前で立ち尽くす月夜と遙の耳に三咲の母親の悲痛な叫びが届いていた。

『どうして？それは何が要因で死に至るかを訊いているの？』

「・・・わからねえよ・・・そんなこと・・・知りたくない」

『そう、さあ、彼女に会いに行きましょう』

「待てよ。月夜は平気だろうけど俺は他の人にも丸見えなんだぞ？」

それに何の不都合があるのか分からないといった表情で小首を傾げた月夜に、遙は溜息を吐きながら説明を簡単にした。

『・・・そうですね。死に至る娘の前に見ず知らずの人間が来るのはいい気持ちではないかもしれませんが。こちらに来てください』

月夜に言われるままに遙は月夜の後を追った。

男子トイレに何の躊躇もなく入っていき、個室に入る月夜。

しぶしぶ遙も月夜と同じ個室に入った。

『今から、遙の魂だけ抜き取ります』

「はっ！？何言ってるの！？」

『別に何の問題もありません。死にはしないし、戻れないこともありません』

「はあ・・・ゆ、幽体離脱みたいなもん？」

『そうですね、そういったようなものですね』

あまりいい気分はしないが、こういった状況では仕方ないと覚悟を決めた。

洋式の便座に腰掛けた遙の額にひやりとした月夜の手が触れる。

柔らかくてどこか落ち着くような感触に遙は頭の奥から外に向けて走る快感の波を感じた。

『脱魂・御動』
だっこん・おんどう

耳元で囁かれる月夜の声。

頭の周りから耳元あたりをジーンと走っていく快感。ずっとそうして欲しいような気分になるようだった。

『気分はどうです?』

「気分……? 気持ちよかったじゃなくて……っておうわ!」

遙は目の前にだらりとだらしなく身体を便器に預けている自分の姿があった。

「何だ……こりやって……ゆ、幽体離脱とかなんとかいうてたなあ……」

『ええ、脱魂という呪法。只魂を出す脱魂、そしてその魂を定着から解き自由に動かせる法、御動……あなたは今生と死の狭間をたゆたえる存在』

「難しいことは分らんが、これであの子に堂々と? 会えるってことだな」

『そうね。それじゃあ行きましょう』

病室のドアをすり抜けていった月夜に一瞬目を見開き、そういえばそうだと納得して自分もそれに習う。

病室の中は母親と苦しそうに呻いている少女の姿があった。月夜はなんの躊躇もなく、少女に近づき手を額に翳した。

『脱魂・御動』

びくりと彼女の身体が痙攣し、少し薄い透けたような姿の少女がき

よんとした表情で起き上がった。

「ん・・・あれ？ママ・・・ママ、私もう苦しくないの。ねえもう泣かないでママ」

『無駄です。貴方の声は届きません』

「！？だ、れ・・・？」

『私はし、むぐ』

「お、俺達は天使なんだ天使！そう、えっと君の願いを叶えるためにきたんだぜ」

怪訝そうな表情をしていた彼女、三咲は遥の天使という言葉にはあつと顔を綻ばせた。

そして、ベッドからジャンプしてこちらへと近づいた。

「そうなんだ、それで私こんなに元気なんだ！」

「へ！？」

「叶えてくれたんだね！私のお願い」

そう、三咲の願いは、元気に走り跳ねたり飛んだりしたかった。ただ、それだけの願いだったのだ。

その言葉を聞いた月夜は無表情に三咲に近づいた。

「待て、待ってくれ月夜！」

『・・・なんです』

「どうするつもりだ」

『何を言っているんです？彼女はもう心残りはないのです。ならば・・・っ殺すっていうのか』

月夜は遥が何を言っているのかまるで分からないといった風に首をかしげた。

その月夜の仕草に言いよの無い怒りにも似た感情が遙の胸を満たす。

『彼女も言っているでしょう？願いは叶ったと、何が問題なのか私には分かりませんが？』

正論だ。

でもそれはあまりにも心が無い。

死神は非情でなければならぬのだろうか？

遙の心中は混沌してゆく。

「魂を狩れば彼女はどうなる？」

『何も感じることなく何も願うことなく私の力となるでしょう』

息を飲んだ。

遙は月夜が死神だと再認識する。

慈悲や人間味そんなものはくだらない幻想に過ぎない。

月夜は只、己のためにこの少女を狩ると言う。

『このまま魂を放置しようとも別の死神が彼女を狩るでしょう。その死神が必ずしも清き魂を狩るものとは言い切れませんよ？』
「・・・なんの話だ？」

月夜と遙が話している最中三咲は病院内を走り回っていた。

誰にもぶつからない、誰も三咲を止められはしないし、止めようともしない。

三咲は自由そのものだった。

『話していませんでしたね？そもそも死神というものの存在意義事態貴方は全く知らない。・・・知らないというのは必ずしもデメリ

ットだけではありません。メリットでもあります。知りすぎれば巻き込まれなくてもいい災難にも巻き込まれ知りたくも無い事実、真実をも目の当たりにする』

そこで月夜は言葉を止めた。
選択をしるというわけだ。

全ては遥が決めることだと、そう彼女は表していた。

「でも、俺は決めた。お前の、月夜のパートナーになるって・・・
決めただろう」

『ええ、そうでしたね』

「だから、俺は知る。俺はあの日に・・・覚悟を決めた」

『それにしても、あまりにも甘いですが？・・・まあ仕方の無いことでしょう。死神とは、只の呼称に過ぎません。私達は元々深く暗い魂の奔流に流されていた者、つまり報われない魂。死者なのです』

遥は呆然とした。

月夜は言う。自分は元はそう、人間だということを。
ならば何故？

同じ人間の魂を喰らうようなことをしなければならぬのだろうか？

『私達死神と呼ばれる存在は、死神となった瞬間に他の死神とは敵対します。つまり出会えばその存在を賭けて死合っ。そういうことです』

「なんで・・・戦わなきゃならないんだよ？やっていることは同じだろうに」

『ええ、そうです。やっていることは変らない。何一つ。只、死神になった時に刻まれるある意思を除いては何の違いもありません』
「意思・・・？」

『根底に刻まれた願い。望みといってもいいでしょう。私達死神は

唯一の存在Oneになるために新たな生といってもいい存在を得る。Oneになればその望みが叶う。私達はそのためだけに魂を狩り、戦い、殺しあう』

遙はまるでデジャヴを見ているような感覚に陥る。
どこかで聞いた話だった。

「唯一の存在。例えば人間でいうなら人口50億人以上いるよね？その中でたった一人の生存者。それは唯一の存在。Oneよね？そうだったらどんな願いでも叶うとしたら貴方ならどうすると思う？」

「だから、唯一の存在の話。それに成るためには他の存在は邪魔よね？そうなるでしょう？」

「だったら・・・他の存在をどうすれば消せるかしら？殺す？でもそう簡単に殺させてなどくれないよね？だって向こうだって唯一の存在になれる権利をもっているのだものね」

「なら、戦うしかないよね。君なら・・・戦い、存在を勝ち取り願いを勝ち取りたい？」

「あら、IfよIfの話。深刻に考えることなくそうかなあって感じで答えればいいのに・・・ふふ、でも君らしいかな。私なら、戦うわ。どんなこととしても勝ち取ってみせるわ」

「ねえ、そう思わない？」

「そう、そうね。でも一番大切なもの、大切な人が存在していなかったら？」

「大切なもの・・・存在していなかったら？それを取り戻すことだって出来るのよ？何でも望みが叶うのだから」

花斑 燕だ。

彼女は何かがおかしい。

まるで何か別の生命体のようにすら思う。

One。

何故彼女からまるで月夜の話そのままの言葉が出るのだろうか？

偶然？

偶然にしては出来すぎたほどに話が合致する。

彼女は一体・・・？

『・・・これが本当の私。自分の願いのために人の魂を喰らい続けている。失望したでしょう？軽蔑するでしょう？』

「・・・」

遙は何も答えられなかった。

失望や軽蔑をしないとえば嘘になる。

ただ、自分がそうならばと思う。

あら、IfよIfの話。

もしも・・・俺がそうならば俺は・・・

大切なもの・・・存在していなかったら？それを取り戻すことだって出来るのよ？

だとしたら？

俺は・・・俺は戦うだろう。

全てを犠牲にしても俺はOneになるだろう。

きやああああああああああああああああ

『！？』

「な！？」

月夜は勢いよく駆け出した。遙もそれに習い月夜を追う。
してやられたという苦々しい表情で月夜が呟く。

『少々時間を使いすぎましたね。他の死神が嗅ぎ付けることくらい
予想の範囲ではあったのに！！』

「・・・っ」

このまま魂を放置しようとも別の死神が彼女を狩るでしょう。その
死神が必ずしも清き魂を狩るものとは言い切れませんよ？

遙を焦燥感が苛む。

何故三咲を出て行かせてしまったのだろうか？

月夜は言っただけだ。死神は自分だけではないと。

ならばどんな狩り方をされるかも分からないのなら、月夜に・・・
月夜に狩らせるべきだったんじゃないのかと。

俺はミスを犯した。

パートナーが聞いて呆れる。

人々をすり抜け病院のロビーへと出た。

そこには周りに助けを求め懇願する哀れな魂があった。

「助けてっ！殺されちゃう！あの人にあの人に殺されちゃう！助けてっ！！！」

『ふふ、あはは！誰も貴方を助けてはくれないわ！そう、貴方のママでもね！』

鎌を振りかざし彼女の両足を切断する。

悲鳴があがり苦悶の表情で喘ぐ少女。

鬼のような形相でそれを行う者、それは死神。
そして、遥はその死神の顔を知っていた。

「花斑・・・燕・・・」

第八死：衝突

「花斑・・・燕・・・」

呆然と呟く遥の声を拾い燕は遥に視線を向けた。

『あら、あらあら。遥君じゃない』

「あんた・・・一体」

『もうおわかりでしょ？それともまだ分からないかしら？ふふふ』

それが解らないほど遥は洞察力のない男ではない。

そもそもおかしいと思っではいた。

雰囲気そのものが何故か異質で嫌悪感すら抱いたほどののだ。

遥は遥以外に燕が誰かと話しているのを見たことが無い。

そして響のあの言葉。

「誰と話していたんです？」

あの言葉は人を指していたのでは無いとしたら？

そう、もう答えは出ていた。

あの時、響には遥が独り言を言っているようにしか見えなかったのだろう。

何せ、遥が話していたのは死者であり。

死神なのだ。

「たすけ・・・て」

三咲の掠れた声に遥は我に返った。

這いずるような動きをしている三咲の傍に駆け寄り抱きかかえる。

『あら、あらあら。どうするつもり？”それ”は私の”獲物”よ？』
『いいえ、貴方のものではないわ。云わば貴方は死の匂いに誘われ
てきたハイエナね』

嘲うような燕の言葉に冷徹な挑発を含む言葉が月夜から放たれた。
燕は月夜を一瞥し、噴出すように笑う。

『あら、どこかで見た顔だと思ったら・・・丁度良かったわね？貴
方のこと殺してやろうと思ってたところだったのよ』

『そう簡単にくれてやるほどの”願い”ではないわ』

そう言うやいなや、月夜はその手に死神の鎌を顕せる。

『死合います。遥、逃げなさい。その娘を連れて逃げなさい』

『あらあら、私と死合つ前に魂を喰らわなくても？勝てないと分か
っていたのでしょうか？うふふふ・・・いいわよ？”貴方”の”獲物
”だったんでしょ？待ってあげようかしら？』

三咲がぐくりと息を飲む音が聞こえた。

遥に縋りつく手が細かく震えているのが分かる。

月夜は一瞬たりともこちらを振り向くことは無く、最早興味もない
という感じで言い放つ。

『私が喰らうのは”清き魂”貴方と違ってね？今の彼女の魂など私
にとってデメリットでしかないわ』

『あら、そ。いいわ、見逃してあげる。今はね。でも、貴方を殺し
てもう一度恐怖と失意の中で・・・三咲ちゃん？貴方を喰らってあ
げ・る』

三咲が遙の胸に顔を埋めて震える。

これ以上ここにいてはいけない、遙は直感でそう思う。
これ以上この娘の魂を穢してはならない。

遙は三咲を抱きかかえるようにして走り出した。

何処へ向えばいいのかそれすら分らない。

只、遙はいつの間にか無意識にも似た感情で何処か確信があるようにその場所に向った。

『貴方、本当に勝つつもり？』

『何を言っているんでしょう？勝つ？負ける？貴方はこの死合いを勝負かなにかと勘違いしているんですか？』

燕は月夜の言葉に眉間の皺を刻んだ。

次には無言で鎌を月夜に向けた。

『コロシテヤル』

『やれるものならね？』

月夜の首を刈るように正確に鋭く空を裂く。

月夜はその鎌を避けることなく冷静に鎌を自分の首まで上げて受け止める。

金属が強く打ち付けられる音が響く。

吹き飛んだのは月夜ではなく攻撃を放ったはずの燕だった。

『……術式！？』
じゆつしき

『障壁・月光私の能力はまだお見せしてませんでしたね』

『油断してたわね。出たてのルーキーと思ってたのが迂闊だったわ』

素早く立ち上がりながら燕は鎌を構えなおす。

先程はその鎌からは何の力も発現してはいなかったのだが、燕の揺らめくような瞳が赤く輝き、それに呼応するかのように鎌からは煉獄のように紅い瘴気が揺らめいた。

『瘴撃・焰！』
しやうげき・ほむら

灼熱の衝撃波が月夜に襲い掛かる月夜は魂が消え去るほどの衝撃波に吹き飛ばす。

ロビーの窓ガラスを突き通り外に転がり消滅する。
数瞬の後、窓ガラスは何の前触れも無く弾け飛んだ。
ロビーにいる病院関係者や患者達は悲鳴を上げて遠ざかる。

『ふん！コノ程度じゃやっぱりルーキー程度よね』

せせら笑う燕が顔を強張らせて前方へと転がり殺気をかわす。
体勢を立て直し自分が今しがた居た場所を見やる。

『あんた・・・』

月夜は無表情に振りぬいた鎌を回転させ、口元を歪める。

『瘴気・月影。しやうき・げつえい幻さえも見分けがつかないなら、貴方こそルーキーね』

『・・・っ！言わせておけば、調子に乗るのも程々にしなさいよ？』
『調子に・・・乗る？果たしてどちらが調子に乗っているのかしらね』

『！？殺す・・・コロシテヤル！』

月夜は黒いスカートを翻し一步間合いを開ける。
燕が禍々しく光る鎌を振りかざし、地を蹴る。

相当の速度で振りぬく鎌を足を半回転させ鎌を避けると同時に回し蹴りを放つ。

燕の鎌が地面に突き刺さると共に月夜の蹴りが燕の首に叩きつけられる。

凄まじい衝撃に燕は身体を回転させながら吹き飛ばされた。

『か、はっ・・・』

『怒りは自らの力を倍増させます。ですが、冷静さを欠き、判断を鈍らせます。冷静さは判断を重視し、自然体で物事を受け止めることができるでしょう、ですが、怒りに任せるより遥かに苦痛を伴い、慣れていく・・・慣れるとは人の心さえも失っていきます』

『せ、つきよ・・・うでも始め、るつもり?』

『いいえ。・・・私は・・・そうですね。話し合いをするために死合っているではありませんね』

『そう、いう、こと!-!』

「はあ、はあ、はあ、はあ・・・」

抱えた少女は泣き疲れたように浅い眠りにについている。
ようやく目的の場所に着いたかのように遥は足を止めた。

「俺・・・何やってんだ・・・畜生!」

夕刻に染まる空と地。

オレンジ色の光に照らされ、神秘的な空間を醸し出す。
この時間、遥はこの場所に来るのはあの日以来だった。
理由は無い。

ただコノ場所は遥にとって大切であり恐怖だった。
特にコノ時間は、嫌な記憶が蘇りそうで恐怖だった。

心臓がドクドクと鼓動を打つ。

三咲を地面に横たえ、遥も疲れ果てたように雪華の傍に寝転がった。
思い出したくて堪らない。

思い出した時にそれが耐えられないものだったらと恐怖が堪らない。

板ばさみが耐えられない。

「何を・・・恐れてるんだ。畜生っ」

大切だった。

そう大切なのは彼女だ。

この場所は彼女の大切な場所。

俺は彼女が大切に、彼女の大切な場所だから大切だった。

（ハルちゃん・・・）

耳朵を擦る彼女の声。

幼い声だが綺麗で透き通る。

彼女の声が好きだった。

彼女の歌が好きだった。

彼女の髪が好きだった。

彼女の瞳が好きだった。

彼女の笑顔が泣き顔が悪戯な顔が・・・

彼女の全てが・・・
大好きだった。

なのに忘れた？

どうして忘れた？

彼女を失ったことも。

彼女の名も。

彼女の・・・顔も・・・。

何故・・・。

遥は激しい感情の波に揺られながら暗い闇の中に吸い込まれるように眠りに落ちていった。

薄っすらとゆっくりゆっくりパレットの色が混ざり合うようにオレンジの空間は藍色へと染まっていった。

どんどんと混ざり合い。

闇は色を濃くしていった。

遥の心そのものかのように・・・。

第九死：月下

「ハルちゃん・・・ねえハルちゃん・・・」

「ん・・・」

「ふふ、こんなところで寝てたら風邪ひいちゃうよ?」

「ふあ・・・あ、ごめん——ちゃん。歌聴いてたらすぐ眠く・・・
つてごめん!」

僕は言葉を言うそばから失礼なことを言ってしまったと思い謝る。
でも彼女は嫌な顔一つせず微笑んだ。

そんな優しい彼女が好きだ。

陽だまりのような暖かな微笑みが大好きだ。

「ハルちゃん。大好き」

「僕も大好きだ」

それが当たり前で当然のように僕らは小鳥のようなキスを交わした。

切なくて甘い記憶。

今でも覚えている、あの愛しさだけは忘れない。

・・・。

「・・・ちゃん」

・・・？

「・・・いちゃん」

誰かが呼ぶ声がする。

「お兄ちゃん！」

うん、気のせいのようなだ。

俺には妹はいません。

ですから、したがって俺のことではないという答えがでるのだ。
冴えてるね俺！

遙が開けた目をもう一度閉じる。

すると、三咲は頬を膨らませて遙の頬を抓る。

「いれれ・・・いらいうの！はなひなはいっ！」

「いてて・・・いたいつうの？はなしなさいっ？」

「わはってるはらはなへーっ」

くすくすと笑いながら三咲は遙の頬を優しく撫でた。

恐怖が収まったかのような笑顔に遙はほっと胸を撫で下ろす。

足を切断され、膝小僧で歩く姿は何とも痛々しいが、本人は痛みを感じない様子らしく歩きにくい程度の感じらしかった。

「ね、お兄ちゃん」

「んあ？」

一瞬誰のことか分からない遙だったがすぐにここには自分以外誰もいないと気付き返事をする。

「お兄ちゃんは・・・私のこと・・・その・・・ころすの？」

遠慮がちに口に出すその言葉は遙の胸を抉る。

ころすの？

それは間違い、ころすのではなく、彼女は死ぬ。

放っておいても死ぬのだ。

だが魂は？

魂は既存する。

ならその魂は殺すことにならないのだろうか？

「・・・お兄ちゃんは・・・天使さんじゃないの？」

言葉が出ない。

喉がひりつく様に遙は唾を飲む。

「私・・・生きたいよ、もっともっと生きたいの」

それはどうしようもない。

彼女は今日死ぬ。その運命は変える事は出来ないだろう。

遙は心が軋むように音を立てている気がした。

「我儕言わないから、お利口さんになるから・・・だから、私を助けて」

ぎりつと噛み締めた奥歯が音を立てる。

「お兄ちゃん・・・お兄ちゃん・・・」

遙は満面の微笑みを浮かべた。

「ああ。俺は君を助けるよ」

「ほ、本当!？」

三咲の嬉しそうな顔に優しく微笑んで頭を撫でてやる。

「ああ。本当だ」

『か、はっ』

『終わりですね』

燕の肩口から心臓の辺りまで鎌が食い込んでいる。
夥しい紅い血液が噴出している。

だが、地面に着く前に消滅していく。

それは彼女達が人間ではなく死者だという証。

『お、われない』

燕は渾身の力を振り絞って月夜を突き飛ばす。
月夜は難なく地面に着地し、燕に突き刺さった鎌を再度手元に現せた。

『足掻くのは自由。私は貴方の願いを殺します』

『さ、せる、ものです、かつ』

許せるものか。

燕は眼光鋭く月夜を射抜く。

傷口を押さえることなく、燕はよろよろと鎌を構える。

『ど、んな・・・おも、いで・・・いまま、でやって、きた、か知らないくせに』

唇を噛み締めて力強く地面を踏みしめる。

分かっていた、このままでは確実に殺されることは。

『かん、たんに・・・諦められる、願いが、ある、わ、けないでし
ようっつ！！』

燕は地を強く強く蹴る。

風のように身体を空中へと打ち出す。

音速にも近い速度で燕は月夜の足だけを狙う。

それを確実に読む月夜。

しかし、足元をガードした月夜は目を見開く。

カラカラと鎌が月夜の鎌に弾かれて地面を回りながら音を立てた。
すでに燕の姿は月夜の視界には存在しなかった。

『・・・そう、諦められないから・・・死神は生まれる』

月夜はあえて追うことはせず消え行く鎌を無表情に見ていた。

月の光の下で輝く華。

冬にしか咲くことの無い華。

雪華。

「わぁ・・・この華・・・光ってるよお兄ちゃん」

「ん？ああ・・・その華は月明かりで淡く光るんだ」

「なんていう華なの？」

「雪華・・・本当の名前は知らないなあ」

ザリつと地面を歩く音がする。

その音の主を確認する必要は無かった。

魂がそれを知っていたから。

それは自分自身。

虚ろな表情で機械的に歩く自分の姿。

それに連れ添うように歩く影は月夜だった。

「あ、れ？お兄ちゃん・・・双子・・・？」

きよとんとした顔で遙を見上げる三咲に優しく微笑んだ。

『恐怖を感じますか？』

無表情に不躰な質問をする月夜に三咲はゆっくり首を振った。

「お兄ちゃんが言ってくれたの。私を助けてくれるって」
『・・・』

遙は精一杯の優しさで三咲の頭を撫でてやる。

「目を閉じて。次に開いたときには君は元気にママと家に帰るんだ」
「ほ、んとう？」

屈託の無い瞳。

本当に嬉しそうに遙を見上げた。

遙は微笑む。

それが真実だと言わんばかりに。

瞳を閉じた三咲を見て、虚ろに月夜を見やった。

月夜は何も言うことなく鎌を手に見せた。

ゆっくりと三咲に近づいて本当にゆっくりと振り下ろした。

三咲という少女は、死んだ。

それが運命であつたし、それは変えることは出来なかった。
月夜は遙を肉体の中に戻して、疲れたように溜息を吐いた。

『よく、やってくれました』

労いの言葉が遥の耳に届く。

だが、遥は奥歯を噛み締めた。

許せなかった自分の狡猾さが、下司さが、卑怯さが。

自分自身が許せなかった。

力を失ったように膝を折った遥が、地面を強かに拳で打ちつける。

ガツガツ！ガツガツ！ガツガツ！！

力の加減をしてないのか、血が飛び散っていた。

『遥』

「俺は！！」

思い切り拳を地面に叩きつける。

痛みなんて感じられなかった。

何もかもが空虚にすら感じた。

「俺は！！下司野郎だ！！最低だ！くそつくそつ！畜生！！」

『遥・・・』

煮えたぎるような怒り、それが遥を蝕んでいた。

だが、月夜の反応に遥は何よりも驚き、一瞬全てを忘れ去るほどの呆気にとられる。

月夜は膝を折り、遥の頭を胸に埋めた。

優しく撫でられる髪。

分からなかった、何故月夜がこんなことをするのかも。

月夜の心も・・・。

何も分からない。

だが、遥の瞳が滲み、涙が零れた。

一筋だけ、つうつと。
零れ落ちる。

遥は月夜を抱きしめた。
何故だか分からない。

今は・・・月夜を感じていたかった。

第十死：崩壊

「嘘つき」

ああ

分かっている。

俺は卑怯で下司な嘘つきな野郎だ。

「助けてくれるって言ったのに」

ああ

でも俺は君を騙した。

もう何が望みで何がしたいのか分からない。

俺は……。

コンコン。

控えめなノックの音で遙は薄く瞳を開けた。
朝日が差し込む部屋で遙は虚ろに起き上がった。

「遙君？ああ、起きた？つて大丈夫？顔色悪いけど」

「・・・え、ああ・・・大丈夫」

「大丈夫つて・・・本当に？」

「あ、着替えてすぐ行くよ」

「あ・・・うん」

起き上がり、制服を手にする遙を見て怪訝そうにした円だったが、
すぐにドアを閉めた。

円の用意したハムエッグとトーストを無理やり喉に押し込む。
はつきり言って食欲は皆無だった。

何もかもがどうでもいいような虚無感。

「遙君？だ、大丈夫？」

「なにが？」

「・・・なにがって・・・」

鬱陶しかった。

円が。

何故円はいつまでも遙の傍にいらんだろうか？

もう、兄は戻らないと言うのに。

心が壊れるほどの闇が遙を苛む。

「円さん」

「え、何？」

何を言うつもりなのか自分でも分からなかった。
ただ、何故か遥は円が邪魔な存在とも思えた。

「もう、大丈夫だから」

「え・・・？」

「円さんは、円さんの人生を歩くべきだよ。兄貴もそう思うはずだよ」

「・・・え」

心配してもらえる権利は無い。

愛される価値も無い。

どうしようもない嫌悪感が遥の中に芽生えていた。

「な、に？どうしたの？遥・・・くん？」

「いい加減家族ごっこはやめてくれ」

無意識にも思える言葉が吐いて出る。

最低だ。

俺は最低な人間だった。

「っ・・・」

この世の終わ리と思われるほどに円は悲しそうな顔をした。
その表情が遥の心を抉る。

しかし今はその苦痛こそが遥にとっては心地良いほどだった。

「ど、うしたっていうの・・・遥・・・くん」

「いい加減にしようよ、円さん。こんなこと続けて何になる？意味なんて無い。もっと早く言うべきだった・・・俺は・・・一人でも

大丈夫だから」

「私・・・私は――」

円が反論する前に遥は口を開く。

最低でどうしようもないほどに下司な言葉を。

「それとも俺は兄貴の代わり？」

「――っ」

悲鳴にも似た反応がこの家を凍りつかせた。

もう、どうしようもないほど修復も出来ない関係だろう。

遥は円を傷つけた。

腐りきった自分の心が許せなかった。

円を傷つける必要など何処にも無かったはずなのに。

「・・・っ・・・」

声を凝らして泣いている円を見て遥は自分自身を殺してやりたくて仕方が無かった。

もう、円はコノ家にくることはないだろう。

遥は漠然にそう思う。

ゆっくりと席を立ち、円を振り向くことなく遥は声をかけた。

「さよなら、円さん」

遥は学校へと急ぐ、別段遅刻するとも思えない時間帯だが、一つ確認したいことがあったからだ。まだ人のまばらな校内で3階を目指した。

上級生がちらほらと廊下に出て話しているのを見つけ、遥は見知った顔を見つけ近づいた。

「緑先輩」

「ん？あら、遥くんだったの？私に何か用なの？」

たろはなみどり
橘 緑

優しい瞳に微笑みを絶やさない顔。

セミロングの髪は絹のように滑らかで少し栗色掛かっている。おっとりとした人で、遥とは中学の頃からの知り合いだった。出合いは雨の日だった。

彼女はその日傘もささないで人のいない校庭で立ち尽くしていた。後から聞いた話ではその日好きな人に振られたのだそうだった。

遥は偶然とはいえ夜更かししたせいでホームルーム中に寝てしまい、とつくに下校時間を過ぎ去った時間に目を覚ました。

遥が急いで下駄箱に走ると、そこに校庭に立ち尽くす緑の姿を見つけた。

「何・・・してるの？」

不意にさしかけられた傘と遥の声に驚いて振り返った。

緑はびしょ濡れになった体を抱えるように切ない微笑みを浮かべた。

「傘・・・忘れちゃって」

遥は薄く笑って、一緒に帰ろうと言った。

その変な出会いから緑と遥は次第に話しかけだす間柄となり、緑が

卒業するころには友人といえる間柄になっていた。

「緑先輩に聞きたいことあって」

「ん？うん、何？」

「3年生にさ、花斑 燕つて人いる？」

「え？はなぶち・・・つばめ？さあ・・・聞いたこと・・・ないなあ。この学年なの？」

それで分かったとでも言いたげに遥は笑った。

「まあ、ちょっと気になってただけ。ありがとう緑先輩」

「そう？役に立てなくてごめんね？」

遥は踵を返して教室に向う。

「遥くん、今度家においで、またケーキ焼いたげるからね」

遥の背中に緑の声がかかり、遥は顔だけ向けて微笑んで頷いた。

階段を下り教室に着くとまだ時間が早いらしく、教室内には一人しかいなかった。

「あ・・・高野君・・・は、はいね」

「ん・・・おはよう、早瀬さん」

「お、おお、おはよう！」

どもりながら声を掛けてきたのは

早瀬^{はやせ} 悠里^{ゆうり}

遥のクラスの委員長である。

薄い栗色の淡い髪は腰ほどまで伸びており、耳の上あたりを可愛ら

しくリボンで結んでいる。

幼い顔をしてはいるが、時折見せる大人びた微笑が男心を掴んで離さないほどの魅力の持ち主である。

特に仲良しというわけではないが、誕生日やバレンタインではプレゼントを貰ったことがある。それが、好意なのか義理なのかは遙には判別つかない。

「どうしたの？今日は早いんだね」

「ああ、ちよつと用事があつてね」

適当に話をあわせるが、今の精神状態ではいつ人を傷つけてしまうか分からない。

どうせなら誰にも話しかけて欲しくは無かった。

しかし、遙は根暗でもなければ友好関係が無いわけではない。

ましてや友好関係のほうが幅広いのだ。

一日中話しかけられることはあっても、話しかけられないことはないだろう。

「え・・・と・・・あ、き、今日の数学の宿題出来た？」

「ん・・・あー・・・やってないな。すっかり忘れてたよ」

「も、もしよかったら・・・写す？当てられたら大変でしょ？」

「ああ、助かるなあ・・・さんきゅっす」

話題を必死で探すような悠里に適当に合わせる会話。

遙にとって何よりも疲れる作業にほかならなかった。

甲斐甲斐しく悠里はノートを取り出してそのページを開いて遙の机まで持ってくる。

「はい、ここだよ。あ、間違ってたらごめんね？」

ぺろつと舌をだして言う悠里に曖昧に笑う。

正直どうでもいいことだった。

宿題を忘れ、教師に怒鳴られようと別段遙にとってどうでもいいことだったのだ。

ノートを写しながらぼうつと物思いに耽る。

遙の心を侵食しているのはやはり三咲の事件だった。

覚悟していたはずだった。

そのつもりだった。

兄を殺した犯人は許すつもりは無いし、殺してくれるなら喜んでそうしてもらう。

だが、あの少女は何の悪も行っていない。

それが遙の心をボロボロにしていくな。

ただ、彼女は普通に歩きたかった。

ただ、彼女は普通に生きたかった。

ただ、それだけ。

どうして、彼女は死ななければならなかったなどと思つことはない。

それは運命だった。

仕方無いことだった。

だが・・・遙は彼女に嘘を吐いた。

助けてやると。

生かしてやると。

そう言った。

そうしなければ彼女の魂は混濁していった。

だから嘘を吐いた。

そうしなければ彼女の魂を狩れないから。

だから嘘を吐いた。

許せないのは自分の浅ましさ。

「・・・くん」

「・・・のくん」

「高野君！」

いつから話しかけられていたのか分からないが随分呼びかけられていたらしい。

悠里は少し息を荒くしていた。

「わりい、ぼーつとしてた」

「あは、高野君？ノート全部写し終わってるのに今度は教科書の文字写してるんだもん」

「あー・・・ほんとだ。あ、ノートありがとう」

「ううん。お安い御用だよ」

ノートを受け取っても自分の席に戻ることもなくどこかもしもじとした感じで、顔を赤らめている悠里に遥は嫌な予感を感じていた。

雰囲気を感じないわけじゃない。

まだ教室には遥と悠里以外は来てはいるものの教室内にはいない。

実質二人きりなのだ。

もし、悠里が遥に好意を持っているとしたら誘ってくるのは目に見える雰囲気だった。

「あ、あのう・・・えっと、こ、こんどの日曜ってい、忙しいかな・・・？」

「ん・・・分からないかな」

「あ、あの！も、もし・・・もしも予定とかなかったら・・・あ、あの一緒に・・・遊園地・・・行きませんか？」

遥は正直しまったと思った。

忙しいと答えておけばわざわざ断る必要は無かっただろうにと。

悠里の性格上忙しいと聞けば、わざわざそれ以上の誘いをするはずはないだろう。

遥は溜息を吐いて答えた。

「ごめん、興味ない」

自分の口から出たとは思えないほど酷い台詞だった。

本当に今日はどうかしている。

遥は自分自身が分からなくなっていた。

「あ……ご、ごめんなさいっわ、私の……っほっこそいきなり……こんなの……困るはずだよね……ご、ごめんなさい！」

遥はあえて悠里の顔を見ることはなかった。

だが、悠里が涙を堪えているのは十二分に分かった。

言い終わると同じく悠里は教室を走って出て行ってしまう。

入れ違いに入ってきた人影を見て遥はバツが悪そうに机に顔を伏せた。

「最低ですね。高野 遥……今日の貴方は最低です。何があったか知りませんし、知りたいとも思いませんが、どう考えても、今の断り方は最低だと思います」

「……盗み聞きか。いい趣味だな」

「本当に……貴方は」

遥の言葉に呆れ果てたとしても言うように溜息を漏らした。

それ以上何もいうことなく、響は自分の机に移動した。

遥はガンと机を一度殴りつけ席を立った。

「サボリですか」

背中にかかる響の声を無視するように遥は鞆をもって教室を出た。せめて今日は悠里に顔をあわせるのは悠里にとっても自分にとっても良くないだろうと思った判断なのだが、響はそれを察したのだろう。

遥は人の波に逆らうように逆に歩き出す。

いそいそと学校へ急ぐ生徒達の脇を縫って繁華街へと繰り出した。

空の晴れ晴れさが嫌に目に付き遥は舌打ちをしながら歩いた。

行く先など決めていないし、決める必要も無かった。

遥は鞆を肩にもたれさせる様に持ってだらだらと行く先無く歩くのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1081a/>

月下の雪華

2010年10月9日21時53分発行